

共同研究成果報告書

提出日：2025 年 3 月 6 日

名城大学 学長 殿

受入引受教員 (共同研究者)	所 属 ・ 職 名	法学部法学科・准教授
	氏 名	矢嶋 光
研 究 員 氏 名	モニカ・ヨアンナ・ナブロッカ (国籍： ポーランド)	
共 同 研 究 期 間	2024 年 9 月 4 日～2025 年 2 月 28 日 (5 ヶ月 25 日間)	

共 同 研 究 要 旨	「日本の文化と外交—ソフト・パワーとしての日本の食文化—」というテーマのもと、ワルシャワ大学東洋学部（ポーランド）からモニカ・ヨアンナ・ナブロッカ先生を招へいし、共同研究を実施した。ナブロッカ先生は、日本の食文化の歴史を探究されている新進気鋭の研究者である。一方、日本の食文化は世界のなかでも好意的に受け入れられ、価値観や文化によって相手を魅了する、いわゆるソフト・パワーの一つとして機能していると言われる。今回の共同研究は、こうした日本の食文化がどのように海外に伝播し、浸透しているのかを分析することで、文化と外交の関係を探ることを目的とするものであった。
共 同 研 究 成 果	共同研究の計画において、ナブロッカ先生は日本料理の作法・調理法の流派の一つである四条流庖丁式および四条流から分派した大草流に関する研究をおこなう、とし、受入教員は、ナブロッカ先生の協力を得て、平安時代に始まり、室町時代にかけて完成された日本の伝統的な食習慣・食文化がどのようにして海外に発信され、そしてどのようなかたちで受け入れられているのか、といった点をポーランドに即して調査する、とした。受入教員は、ナブロッカ先生の研究の進展をサポートし、同先生は、当該研究期間中に博士号および四条真流庖丁式の師範を取得された。このほかに、日本の食文化の伝播と浸透に関しては、お弁当文化の歴史とそれがどのようなかたちで海外で受け入れられているかについて、共同講義のなかで発表した。ポップカルチャーのような商業性の高いコンテンツに対して、ハイカルチャーの海外における伝播、浸透にはナブロッカ先生のような研究者の存在が重要であり、日本の好感度を高める重要な役割を果たしているといえる。

共同研究終了報告書

提出日： 年 月 日

名城大学 学長 殿

研究員氏名	モニカ・ヨアンナ・ナブロッカ	
研究期間	2024年9月4日～2025年2月28日（5ヶ月25日間）	
受入引受教員 （共同研究者）	所属・職名	法学部法学科
	氏 名	矢嶋 光

研究課題名	日本の文化と外交—ソフト・パワーとしての日本の食文化— Japanese culture and diplomacy: Japanese food culture as soft power
研究結果	上記のテーマにもとづく共同研究の計画のなかで、私は、日本料理の作法・調理法の流派の一つである四条流庖丁式および四条流から分派した大草流に関する研究をおこなう、としました。 私は、このテーマと分担に沿って、四条流庖丁式の一流派である四条真流の五代目家元のもとで同流派に伝わる巻物について研究を進めました。家元へのインタビューのほか、関連する文献、とくに文学に関わるものを収集し、その時代の風習から登場する食材の意味を読み解くといった方法で研究を進めました。帰国後はこの巻物をポーランド語に翻訳する予定です。このような文献史料にもとづく研究だけでなく、実際に家元から稽古をつけてもらい、庖丁式の勉強をしました。稽古は以前の滞日中からつづけていましたが、今回の滞在を機にさらに稽古を積み、師範の免状を取得しました。四条流全体でも、外国人で師範の免状を取得したのは初めてのことです。2月24日には、茨城県水戸市の常盤神社で庖丁式をとりおこない、刀主として魚をさばき、神前に捧げる役割を果たしました。これも外国人としては初めてのことでした。 このほか、受け入れ教員との間では、日本の食文化がどのように海外に伝わり、それが広がっているかという点について、研究をしました。この点については、修士課程で研究していたお弁当文化について、その歴史と海外での受け止め方について、共同講義のなかで発表しました。